

日蓮大聖人御書全集

みようしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

みよう じくどく こと

（妙の字功德の事）

新版
1971
〜
1973

みょうしんあまごぜんごへんじ みょう じくどく こと

妙心尼御前御返事（妙の字功德の事）

けんじ ねん どう ねん がつ にち

建治2年（'76）または同3年（'77）の5月4日

55歳 さい または

56歳 さい 窪尼 くぼのあま

種々 物 た そうろう

すずのもの給びて候。

当 時 農 とき ひと 暇 とき

とうじはのう時にて人のいとまなき時、かように

種々 送 た そうろう

くさぐさのどもおくり給びて候こと、いかにとも申 もう

そうろう ここにゆうどうどの おん 別

すばかりなく候。これもひとえに、故入道殿の御わかれ

忍 おんごせ おん そうろう

のしのびがたきに、御後世の御ためにてこそ候らんめ。

後世 弔 たま そうら 幾 嬉

ねんごろにごせをとぶらわせ給い候えば、いくそばくうれ

しくおわしますらん。

訪 ひと

くさ

つゆ 繁

娑婆 世界

とう人もなき草むらに露しげきようにて、さばせかいに

留 置

幼

者

行 方 聞

とどめおきしおさなきものなんどのゆくえきかまほし。あ

そぶ

ここく

じゅうくねん

め こ

恋

の蘇武が、胡国に十九年、ふるさとの妻と子とのこいしさ

かり あし

付

文

あべのなかまろ

かんど

にほん

帰

に雁の足につけしふみ、阿倍仲麻呂が、漢土にて日本へかえ

とき

ひがし

出

月

見

春

日 野

つき

されざりし時、東にいでし月をみて、あのかすがのの月よ

詠

み

当

とながめしも、身にあたりてこそおわすらめ。

ほけきよう

だいもく

常

唱

たま

しかるに、法華経の題目をつねはとなえさせ給えば、こ

みよう

もん 字 おん

使

へん

たま

もんじゆしり

の妙の文じ御つかいに変ぜさせ給い、あるいは文殊師利

ぼさつ

ふげんぼさつ

じょうぎようぼさつ

菩薩、あるいは普賢菩薩、あるいは上行菩薩、あるいは

ふきようぼさつとう

たも

陳氏

鏡

鳥

常

不輕菩薩等とならせ給う。ちんしががみのとりのつねに

告

そぶ

妻

砧

音

聞

つげしがごとく、蘇武がめのきぬたのこえのきこえしがご

娑婆世界

めいど

告

たも

とく、さばせかいのことを冥途につげさせ給うらん。

みよう

もんじ

はな

菓

はんげつ

また妙の文字は、花のこのみとなるがごとく、半月の

まんげつ

へん

ほとけ

成

たも

もんじ

満月となるがごとく、変じて仏とならせ給う文字なり。さ

きよう

い

よ

きよう

たも

すなわ

ぶっしん

たも

れば、経に云わく「能くこの経を持つは、則ち仏身を持

てんだいだいしい

いちいちもんもん

しんぶつ

とううんぬん

つなり」。天台大師云わく「一々文々これ真仏なり」等云々。

みよう

もんじ

さんじゆうにそうはちじつしゆこうこうえんび

たも

しゃか

妙の文字は三十二相八十種好円備せさせ給う釈迦

によらい

如来にておわしますを、我らが眼つたなくして文字とはみ

われ

まなこ

拙

もんじ

見

そうろう

たと

蓮

み

いけ

なか

お

まいらせ候なり。譬えば、はちすの子の池の中に生いて

そうろう

そうろう

蓮

そうろう

年

寄

そうろうひと

まなこ

候がように候はちすの候を、としよりて候人は眼

暗

見

夜

影

そうろう

闇

見

くらくしてみず、よるはかげの候をやみにみざるがごと

みよう

じ

ほとけ

そうろう

し。されども、この妙の字は仏にておわし候なり。

みよう

もんじ

つき

ひ

ほし

鏡

またこの妙の文字は、月なり、日なり、星なり、かがみな

ころも

じき

はな

だいち

たいかい

いっさい

り、衣なり、食なり、花なり、大地なり、大海なり。一切の

くどく

あ

みよう

もんじ

たも

によいほうしゆ

功徳を合わせて妙の文字とならせ給う。または如意宝珠の

珠

知

たも

詳

たまなり。かくのごとくしらせ給うべし。くわしくは、また

また申すべし。
もう

ごがつよつか

五月四日

伯耆どの

はわき殿、

もう

申させ給え。

たま

日蓮
にちれん

花押
かおう